



雨でしとどに濡れた花。このしづくを美しいと思う心は皆同じなのだろうか



雨の音、傘の色

高橋 順子 さん

詩人

雨が降りだすと、驚くことに街には、あっという間に色とりどりの傘がひらく。このごろ気象情報も精度を増していることがあるが、そういうのをチェックしなくても、雲行きが怪しいときは人は折り畳み傘を持って出るのだが、どうもふだんから携行している人もいるようだ。

数年前トルコに行ったとき、現地ツアーガイドの男性は傘を持っていないと言っていた。じっさいかなりの雨でも彼は濡れて歩いた。でも雨はじきに止んで、カッパドキアの奇岩の間に虹がかかった。

日本では自分の傘を持っていない人はまずいないだろう。湿度が多いので、髪や服が濡れてしまったら、乾くまで時間がかかって、みじめな思いをするからである。

湿気といったら、息苦しい感じがするが、辺りに水分がたちこめているといったら、細胞にみずみずしさを与えてやれそうな気分がして悪くない。しとどに降る雨を室内から眺めていると、雨水が心の^{おり}澱を流していってくれるような気さえする。私たちの心情にはよかれあしかれ、はっきり黑白をつけずに「水に流す」ことで、精神の安寧を得たいとのぞむものがあるようだ。もう一度すんなりやり直せるかもしれない、なんて思いながら、いつまでも

雨を見ていたい。

むかしはかさばって重たい、から傘をさしていた。竹の骨に紙を張って油をひいたもので、携帯には不向きなものだった。都会の子はもう^{こもりがさ}蝙蝠傘だったかもしれないが、田舎の子だった私は子ども用の番傘をさしていた。新しい茶色の番傘は表面の油が固まっていてなかなかひらけない。父がベリッとひらいてくれた音、油のきつい臭いなどが思い出される。雨の音がバチバチはじけて景気がよく、「行くぞ」という気になった。雨のほうでも楽しそうで――。

いつだったか京都に行ったとき、土産物店でなつかしさのあまり、きれいな蛇の目傘を買ってきた。東京に帰ってから製造元を見ると、都内江東区ではないか。一人恥ずかしい思いをした。外国の人が日本土産に買っていくものだった。

私は^{すげがさ}菅笠をかぶって歩いたこともある。数年前、連れ合いと四国八十八ヶ所のお遍路をしたとき、大雨の中でも「^{どうぎょうにん}同行二人」などと墨書してある菅笠にレインコートで歩いた。雨の音しか聞こえない静けさもいいものだった。雨で濁った川のほとりを人間界を半分はみでているような、そんな気持ちで辿った。



高橋 順子 (たかはし じゅんこ)

千葉県海上郡飯岡町（現・旭市）生まれ。千葉県立匝瑳高等学校卒業。東京大学文学部フランス文学科卒業。青土社などの出版社に勤務。1993年（平成5）10月、作家の車谷長吉さんと結婚。1998年（平成10）から2004年（平成16）まで法政大学日本文学科非常勤講師。主な著書に『水のなまえ』（白水社 2014）、『雨の名前』（小学館 2001）、『時の雨』（青土社 1996）などがある。